東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2017
「美しく生きる　～大学は知の宝庫～」

第 3 回　11/14（火）13:30～15:00　報告

戦時下の文化統制と民衆のくらし

講師　大蔵真由美（本学講師）　　於：図書館大セミナー室

＊◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆＊

平成 29 年度第 3 回公開講座（受講者 20 名）が 11 月 14 日に開催されました。短期大学部幼児教育学科講師の大蔵真由美先生による「戦時下の文化統制と民衆のくらし」と題された講演は、戦争という悲惨な状況に置かれたなかにも、ひたむきにしたたかに生きていく民衆のくらしと文化が紹介されました。史料探しに方々の図書館や文書館へ足を運びましたが、廃棄されていたり焼失していたりで苦労の連続だったそうです。今回の講演はその貴重な史料のなかからのお話です。印象深いお話の幾つかをご紹介します。

まず初めに、現在も上映されている映画『この世界の片隅に』を 10 分間視聴しました。あらすじは、広島市江波から呉に 18 歳で嫁いだ主人公すずが戦時下の困難のなかにあっても工夫を凝らして、豊かに生きる姿を描いた物語です。戦時下に確実に存在していた人々の生活世界がリアルに感じられ、高い評価を得ています。

1945 年を起点としてその人がいつ生まれたかを示す数え方をしてみると、先ほどのすずさんはプラス 27 歳という数え方になります。講演者はマイナス 38 歳になります。戦争を風化させないためにも貴重な歳の数え方です。

内容的には、歴史上の３つの活動が紹介されました。1 つ目は、新体制運動をきっかけとした知識人・文化人と民衆の接近です。新体制運動のなかで民衆の生活文化への注目が高まり、知識人・文化人の民衆に対する啓蒙運動が広がりました。この当時の地方の文化活動の動きを見ると、画一的な組織化が進む一方で、自主的に運動を推進する動きもありました。全体主義的として一律に批判するのではなく、史料の詳細な検討を積み重ねてグラデーションのあるものとして捉えることが必要とのことでした。

２つ目は大政翼賛会文化部の活動が紹介されました。昭和 15 年 12 月 1 日発行の「大政翼賛会会報」が資料として配布され、その当時の活動を知ることが出来ました。生活文化に関する準備会では、知識人・文化人の協力のもとで農山漁村での新しい文化的祝祭をつくるなどさまざまな議論が行われました。大政翼賛会が一国一党的な組織であるとすると、天皇中心の国体に反するという批判を受け、綱領をもつことが否定され、そのための運動目標としての実践要綱が示されました。文化部長である岸田は地域での文化団体の組織化を念頭に置いて、それらの割拠主義の打破を目指していましたが、上意下達式のタテ組織が強化されていきます。

３つ目は農山漁村文化協会の活動です。農山漁村では映画や紙芝居、幻灯、歌謡、舞踊、演劇などを上演したり、農業などに関する調査や普及事業を行ったりしていました。千葉県

長生郡高根村（現長生村）の文化村建設奉告祭や安房郡大山村（現鴨川市）の獅子舞の演舞などが紹介されました。また農村における科学的合理性の追究として、日本の住生活の研究、考現学を提唱した今和次郎の研究が紹介されました。漁村生活に適した台所改善指導や食糧増産に寄与するための改善指導などのお話も興味深い内容でした。

内容的には歴史的背景を理解していないとやや難しいお話でしたが、受講者の皆さんは大変熱心に聞いて下さいました。1945 年の敗戦を画期として文化状況や社会の大きなうねりのなかで、ひたむきにしたたかに生きていく人々の姿がよくわかる講演でした。

【講座の様子】